人文科教育研究　34　2007年　pp.87－98

学習者が書いたあらすじの分析
――「そして」と「しかし」の用法を中心に――

山　下　　直

0．はじめに

文法の学習を学習者の言語生活と乖離しないものとするためには，学習者の実態をとらえることが不可欠である。そのためには，学習者が書いた文章を資料として，学習者がどのような文法的課題を抱えているのかをとらえる必要がある。

本稿では，学習者が書いた「走れメロス」（太宰治作）のあらすじに，「そして」と「しかし」が突出して多く用いられる現象について，学習者の表現能力とのかかわりから考察を試みる。

1．資料について

本稿は，東京大学教育学部附属中等教育学校の２年生107名が書いた「走れメロス」（太宰治作）のあらすじを資料として分析するものである(1)。

あらすじは，「走れメロス」の全文通読も含めて，国語科の授業の一単位時間（50分）で書いたものである。あらすじの書き方などについての事前指導は特にしていない。

用紙は，Ａ５版の紙を縦にしたものに12行の縦罫を印刷したものを用いた。学習者にはその中に収まる程度の分量で書くこと以外，特に分量についての指定はしていない。実施時期は2005年12月である。

分析の対象としてあらすじを選んだのは，書く内容を同一にすることで表現上の問題に焦点を当てやすくなると考えたからである。

2．字数と文数

全文数は987文，全字数は35775字で，一文の平均字数は36.2字，学習者一人あたりの総字数の平均は334.3字である。また，一文の字数分布は次の表１の通りである。

【表１】一文の字数分布

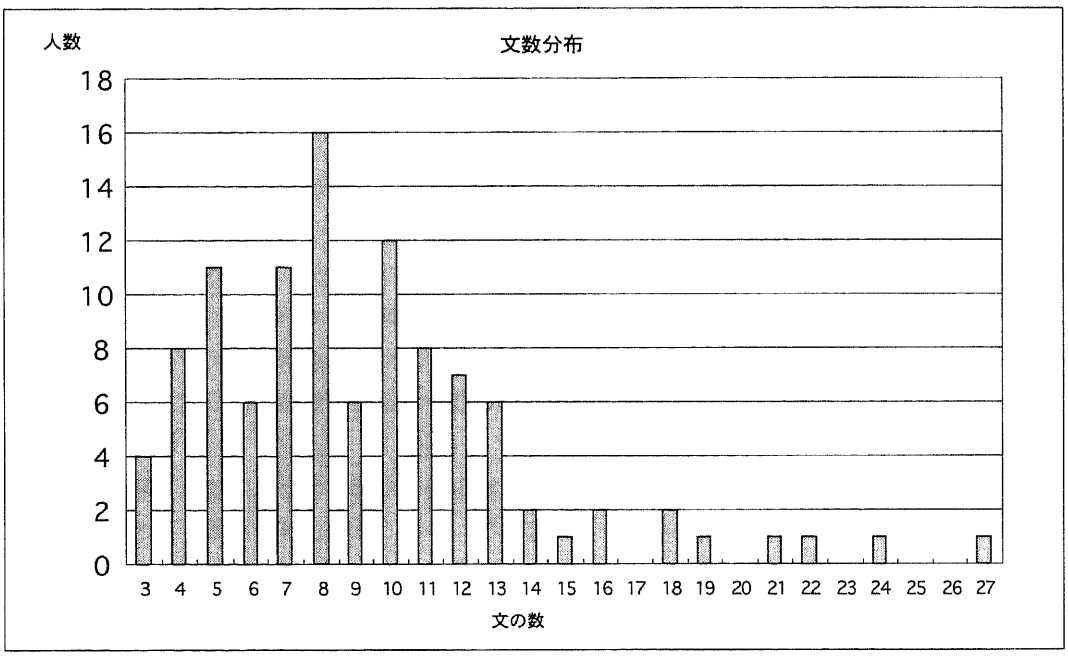
一文の字数	0－9	10－19	20－29	30－39	40－49	50－59	60－69	70以上
文　の　数	46	224	289	214	103	52	30	29
割　合（%）	4.7	22.7	29.3	21.7	10.4	5.3	3.0	2.9

10字からから49字までの範囲に，全体の84.1％にあたる830文が属しており，学習者には一文を適切な長さで区切って文章を書く姿勢が身に付いていると言ってよい。

さらに，107名がそれぞれいくつの文であらすじを書いたかの分布を示したのが下のグラフである。グラフは横軸に文の数，縦軸に人数を示している。

全体の85.0％にあたる91名が，８文構成の16名を頂点に４文から13文の範囲に渡って，ほぼ左右均衡の山型に分布している。一方，20文以上で書いた者も４名いるが，下の表２に示した通り，一文あたりの平均字数はいずれも全体の平均字数（36.2字）を下回り，一文あたりの最高字数を見ても特に長いものがあるわけではない。そのうちの２名は，総字数が500字を超えているが，107名全体で最も多かった字数が616字，500字以上で書いた者が８名いたことに照らすと，他に比べて特に長いわけではないと言える。

以上見てきたことから，本稿で分析の対象とする107名の学習者には，一文を適切な長さで区切り，全体を適切な分量でまとめようとする姿勢が身に付いていると考えられる。



【表２】20文以上で書いた者の字数について

	一文あたりの平均字数	一文あたりの最高字数	総字数
21文	16.3	29	343
22文	23.5	51	517
24文	11.7	32	281
27文	20.3	45	548

3．資料の分析

3－1　分析の観点

以下は，学習者が書いたあらすじの一例である。

a-1　メロスは，妹の結婚式の衣装やごちそうを買いに，町にやって来た。
a-2　そして，メロスがぶらぶら歩いていると，ひっそりとしていて，怪しく思えた。
a-3　そして，なぜかと老爺に聞くと，王が人を殺すと聞いて，メロスは怒った。
a-4　怒ったメロスは，王を殺しに行こうとするが，捕まってしまった。
a-5　しかし，妹の結婚式があるからと竹馬の友のセリヌンティウスを人質として，三日だけ逃がしてもらった。
a-6　三日たち，走って町へ行こうとすると，山賊などに襲われた。
a-7　しかし，メロスはあきらめなかった。
a-8　ギリギリ間に合ったので，セリヌンティウスは助かった。

文頭に着眼すると，半数の4文が「そして」または「しかし」で書き出されている。しかも，「そして」は連続する文，「しかし」は間に一文を挟んでいるだけであり，いずれも非常に近い位置で用いられている。

字数，文数ともに適切な分量でまとめる姿勢を身に付けている学習者が書いた文章にも，「そして」「しかし」の頻出という問題点を指摘することができる。そこで，本稿では，「そして」「しかし」の用いられ方を中心に資料の分析を試みることとする。

3－2　「そして」と「しかし」の出現傾向

全987文中に出現する接続詞の種類と数は，表3の通りである。

接続詞の総数は269例であった(2)。その中で，「そして」と「しかし」が他を圧倒して多く出現している。「そして」（92例）と「しかし」（97例）を合わせた189例は，接続詞全体の出現数の70.3%を占める。

これらのうち，a-1 ～ a-8 の例で見たように，近い位置に出現するものについて調べるため，まずは連続する文頭に出現する場合がどの程度あるのかを調べてみた。その結果，連続する文頭

【表3】接続詞の種類と出現数

そして	しかし	だが・が	すると	そこで	でも	だけど	それから	けれど	そのため	ところが	で	また	それでも	しかも	計
92	97	20	17	15	9	4	3	3	2	2	2	1	1	1	269

に出現する接続詞は132例あり，接続詞269例の49.1％にあたる。接続詞の約半数が連続する文頭に用いられていることになる。

連続する文頭といっても連続するのは２文だけとは限らず，最も多いもので連続する９文の文頭に出現する場合もあった。連続する文と接続詞の出現数については表４の通りである。

この表の見方であるが，例えば「２文」の列の「箇所数」の欄の数値「35」は，連続する２文の文頭に接続詞が用いられている箇所が35箇所あることを意味している。２文の連続が35箇所なので「接続詞の数」は70例ということになる。

また，連続する文に出現する接続詞の種類と数は，表５の通りであった。

ここでも，「そして」と「しかし」が突出して多いことが確認できる。「そして」（52例）と「しかし」（43例）の合計は95例で，132例の72.0％にあたる。連続して出現する場合でも「そして」と「しかし」が７割以上を占めていることになる。

さらに，組み合わせのパターンにも興味深い結果が見られた。連続する文頭に接続詞が出現する49箇所のうち，47箇所に必ず「そして」もしくは「しかし」が出現しているのである。また，３文以上が連続する14箇所のうち13箇所では，「そして」「しかし」のいずれかが２回以上，もしくは「そして」と「しかし」の双方が出現している。

以上のことから，連続する文頭に接続詞が用いられる場合には，かなりの頻度で「そして」と「しかし」が選択され，３文以上の文頭に連続して出現する場合には，「そして」と「しかし」が繰り返し用いられる傾向にあることがわかった。

４．「そして」と「しかし」を安易に選択する学習者

３－２では，「そして」と「しかし」が他を圧倒して多く出現すること，接続詞を連続して用いる場合には必ずと言ってよいほど，何らかの形で「そして」もしくは「しかし」が選択されていること，特に連続する文が３文以上になった場合には複数回の出現が見られることが確認された。

【表４】連続する文と接続詞の出現状況

連続する文	９文	６文	５文	４文	３文	２文	計
箇所数	1	2	2	4	5	35	49
接続詞の数	9	12	10	16	15	70	132

【表５】連続する文に出現する接続詞の種類と出現数

そして	しかし	だが・が	そこで	すると	けれど	でも	それから	そのため	それでも	だけど	計
52	43	11	10	6	3	2	2	1	1	1	132

接続詞を適切に用いるためには，前後の内容がどのような関係でつながっているのかをよく吟味して，その関係をつなぐのに最も適した接続詞を選択することが期待される。したがって，「そして」と「しかし」が他を圧倒して多く出現するということは，前後の関係をつなぐのに最も適した接続詞がどれかをよく吟味することを怠り，安易に「そして」と「しかし」を選択していることを伺わせる。

一方で，接続詞は前後の内容がどのような関係でつながっているかということの他にも，主題の交替，新しい主題の提示の予告として用いられていると考えられる場合もある。

b-1　メロスは王様のもとに親友のセリヌンティウスを置き，必ず帰ってくると約束した。
b-2　王様はメロスのことを，来ないと思っていた。
b-3　王様の心は冷え切っていたのだ。
b-4　しかし，メロスはちゃんとセリヌンティウスのもとへ来たのだ。
b-5　王様は，人の絆の大切さを知る。

b-4 では，b-2，b-3 で「王様は」「王様の心は」と「王様」の側からの描写が続いた後に，再び「メロスは」が主題提示されることを読み手に予測させ，文章の流れをスムーズに感じさせるために「しかし」が用いられていると考えることもできる。このような場合には，主題提示の予告という機能が「しかし」に与えられていると考えられる。

3－2でとらえた「そして」と「しかし」の出現状況から，学習者が前後の関係を吟味することを怠り，「そして」と「しかし」を安易に用いている姿を読み取ったが，そこには b-4 の「しかし」のように，主題提示の予告のために用いられている例も含まれている可能性を残している。もし，「そして」や「しかし」の多用が，主に主題提示の予告によるものであるならば，本稿における分析・考察の前提に大きく影響することになる。そこで，この点をふまえて，主題提示の予告という機能があまり必要とされないと思われる状況での接続詞の出現状況についても確認することとし，具体的な方法として同じ主題「メロスは」を引き継ぐ文脈での接続詞の出現状況について調べることとした。

本稿では，以下に示す例のうち，c-2，c-3，c-6，d-2 のような文を「メロスは」を引き継ぐ文とし，c-4，c-5，e-4 と先に示した b-4 のような文を「メロスは」を引き継ぐ文とはしないこととした。

c-1　メロスは人の心を疑う暴君ディオニスを許せず，激怒して，懐中に短剣をかくして王城に乗り込んだ。
c-2　だが，たちまち巡邏の警吏に捕縛された。
c-3　そして，メロスは処刑されることとなったが，たった一人の妹(ママ)を結婚式を挙げさせたかったので，三日の日限を与えてもらった。

c-4　だが，その代わりに無二の友人のセリヌンティウスを人質としておいていくことになった。

c-5　そして，メロスが三日の間に戻ってこなければ，セリヌンティウスは殺されるため，メロスは自分の村まで走りに走った。

c-6　そして，無事，結婚式を挙げ，王城へ走るが，幾度の試練が待っていた。

d-1　人間不信の王に逆らったメロスは，死刑を言い渡される。

d-2　だが，妹に結婚式を挙げさせたいメロスは，王に頼み，親友を人質に三日間だけ時間を与えられる。

e-1　メロスは，妹と二人暮らししているが，結婚式を挙げようとしていた。

e-2　その村は，いつもはにぎやかなのに静まっていた。

e-3　道で会った人に聞くと，王様がさまざまな人を殺していると言っていた。

e-4　そこでメロスは，王城に行った。

c-2，c-6，d-2は，直前の文で提示された「メロスは」という主題をそのまま引き継いでいる。c-3は，直前の文には「メロスは」は出現していないが，c-1で提示された「メロスは」は，c-2を経てc-3にも引き継がれている。このような場合も「メロスは」を引き継ぐ文とした。

e-4は，直前の文が「メロス」を主題とする文になっていない。c-4は，「おいていく」の動作主体は「メロス」であるが，文末の「なる」が「おいていく」という状況を描写した文であることを示しているので，「メロスは」を引き継ぐ文とは言えない。

c-5は，直前の文が「メロス」を主題とする文になっていないことが第一の理由である。ただし，c-5のような文は，たとえ直前の文で「メロスは」という主題が提示されていたとしても，「メロスは」を引き継ぐ文とはしないこととした。c-5は主節の主語が「メロスは」であるから，直前の文が「メロス」を主題とする文ならば，「メロスは」を引き継いでいると考えてもよいかもしれない。しかしながら，c-5は，接続詞の直後に続く従属節の中に，「セリヌンティウスは」が出現している点で，他の「メロスは」を引き継ぐ文とは異なっている。「メロスは(が)」以外を主語とする従属節の後に，「メロスは」が出現するc-5のようなタイプの文は，たとえ主節の主語が「メロスは」となっていても「メロスは」を引き継ぐ文とはしないこととした。

このような条件のもとに調べた結果，「メロスは」を引き継ぐ文に出現する接続詞は，全269例の63.6%にあたる171例であった。その内訳は表6の通りである。

「そして」(67例)と「しかし」(61例)を合わせた128例は，171例の74.9%にあたる。さらに，連続して出現する132例についても，「メロスは」を引き継ぐ文に出現する接続詞について調べてみた。その内訳は表7の通りである。

連続して出現する接続詞132例のうち，「メロスは」を引き継ぐ文に出現するものは89例であっ

【表6】「メロスは」を引き継ぐ文に出現する接続詞の種類と出現数

そして	しかし	だが・が	すると	そこで	でも	だけど	それから	けれど	そのため	ところが	で	また	それでも	しかも	計
67	61	9	5	10	4	4	3	2	1	2	1	0	1	1	171

【表7】連続して出現する接続詞のうち「メロスは」を引き継ぐ文に出現するものの種類と数

そして	しかし	だが・が	すると	そこで	でも	だけど	それから	けれど	そのため	それでも	計
38	27	5	4	8	1	1	2	2	1	0	89

た。そのうち,「そして」(38例)と「しかし」(27例) は65例で73.0%にあたる。

これらのことから,「メロスは」を引き継ぐ文脈で,「そして」と「しかし」が頻繁に出現している状況を確認することができ,最も適切な接続詞がどれかをよく吟味することなく,「そして」と「しかし」を安易に選択している学習者の姿を伺うことができる。

5．分析結果の考察

5－1 「そして」と「しかし」がつなぐ連接関係

分析結果を考察する前に,「そして」と「しかし」がどのような連接関係をつなぐ接続詞であるのかを整理しておきたい。

「そして」がどのような連接関係をつなぐかについては,「「添加」「累加」といった一つの類型では説明しきれない多様な連接関係」(小林典子(1989)p28),「並列, 因果関係, 時間にまたがる幅広い用法を持つ接続詞」(石黒圭(2000)p30),「「そして」は, 接続する2文間の意味関係を明らかにするより, 2文が接続するという事実自体を明らかにする方にもっぱら重きをおく表現である(同 p31)」,「論理的な関係性を明示する働きを担う接続詞とは性格を異にしている。(島田泰子(2005)p203)」などと述べられ,「そして」が多様な連接関係をつなぐことのできる接続詞であることが指摘されている。

「しかし」は, 前の内容と対立することを後につなぐ場合に用いられる, いわゆる逆接の接続詞である。加藤薫(1991)は, この「対立」のとらえ方について,

> 結論的なことをいえば,「しかし」系の接続語句が関係づけているのは, 前・後件の事柄と事柄自体ではなく, 事柄の背後にある“意味的志向”(含意) であると考える。(p35)

と述べている。加藤薫(1991)の「事柄の背後にある“意味的志向”（含意）」は，従来，話題の転換，提示，導入などと説明されることの多い，「しかし，ふしぎですね。」[3]のような例も含まれている。加藤薫(1991)は，このような「しかし」を「〈それだけでは現状の解決・理解に十分ではない〉として後件を導いている」ととらえることで，「“意味的志向”（含意）のレベルでの対立」があるとし，「「逆接」性は認められる」とする。

同様なとらえ方を示すものとして，沖裕子(1995)の「前件評価のしかし」がある。沖裕子(1995)は，「明日は晴れるとニュースで言っている。しかし，晴れるとどうして分かるのだろうか。」を，「反対の関係」が「言語化された（されうる）部分には見出せない」例として，「論旨を離れて，書き手の詠嘆とでも言うべき感想がいわば「挿入」された格好になっている。」と説明した上で，「いわゆる「転換」（山下注：話題の転換用法のこと）は，「前件評価」と同用法に含める。」と述べている。

沖裕子(1995)は，最終的に「しかし」の意義を，

> 前の部分を後の部分に引き取る形で連接を果たし；何らかの「反対」概念を結び付け；話し手・書き手の主張を聞き手・読み手に向かって成す（p30）

としており，「何らかの「反対」概念を結び付け」という部分に「しかし」が関係づける概念の幅の広さが示されている。

以上見てきたように，「そして」は多様な連接関係を結ぶことができること，「しかし」によってつながれる「対立」は非常に幅の広い概念であることが確認できる。

5－2　安易な用法の背景にある学習者の実態

中学2年生が書いた「走れメロス」のあらすじを資料として，接続詞の出現状況を調べた結果，「そして」と「しかし」が他の接続詞に比べて圧倒的に多く出現していることが明らかになった。これは，学習者が，前後の関係をつなぐのに最も適切な接続詞がどれかを吟味することを怠り，安易に「そして」と「しかし」を用いていることを伺わせるものである。学習者は，なぜ「そして」と「しかし」ばかりを安易に用いるのだろうか。

釣雅行(1982)，大熊徹(1980)は，接続詞の使用が学習者の思考様式の発達段階と深くかかわっていることを指摘している。釣雅行(1982)は，「累加」や「展開」の接続詞（「そして」「それから」など）と，「反対・その他」の接続詞（逆接の接続詞など）の使用と思考様式の発達とのかかわりについて，以下のように述べている。

> 7，8歳以前に使用される「累加」や「展開」の接続詞に加えて，自己の論理を的確に構成していくに必要な「反対・その他」の接続詞の使用が可能になるのである。その時期が，9歳前後であり，中学年段階なのである。(p26)

また，大熊徹(1980)は，「反対型の接続詞」の使用に「でも」から「しかし」への発達傾向が見られることを指摘し，その移行期が「ピアジェのいう「具体的操作期」から「形式的操作期」への移行期つまり，論理的思考力が急速に発達する時期」にあたることから，移行の理由について次のように考察している。

> 具体的操作期にある中学年の児童は，具体的な状況から脱しきれずに話し言葉という状況に密着した言語「でも」を用いるのであろう。ところが，高学年になり（ここで述べてきた分析平均値は六年生だったが）形式的操作期に入ると，自分の意見をより論理的に展開することができるようになってくるので，文章語として抽象的な言語である「しかし」を使えるようになるのであろう。(p35)

中学2年生は「形式的操作期」にあたるので，本稿で分析対象としたあらすじに「しかし」の出現が多く見られることは，発達段階に沿った現象と考えることができる。しかし，本稿の分析結果を見る限り，論理的思考ができるようになること（「しかし」を用い始めるようになること）と，接続詞を適切に使いこなすことは別の次元の問題であると言わざるを得ない。

f-01　メロスは，内気な妹と二人暮らし。
f-02　そして，妹の結婚式のため町に出た。
f-03　そこで，竹馬の友と会った。
f-04　そして，王様が人を信じることを知らないということを知った。
f-05　そして，王様の所へ行き，反抗すると，死刑と言われた。
f-06　しかし，妹の結婚式があると言い，竹馬の友を代わりに人質にしてもらい，急いで村に帰った。
f-07　そして，花婿に無理を言い，次の日に結婚式を行い，すぐに町にもどる。
f-08　しかし，もどる時に，いくつもの難関が待ち迎える。
f-09　しかし，メロスはどんどん進んでいく。
f-10　だけど，メロスは，一回あきらめようとする。
f-11　しかし，一応着いて間に合った。
f-12　そして，王様に感動を与える。

上の例に見られる「そして」と「しかし」の安易な用法は，論理的思考ができるようになっても（「しかし」を用い始めるようになっても），必ずしも接続詞を適切に使いこなすのに十分な表現能力が定着しているわけではないことを示している。したがって，本稿でとらえた接続詞の出現状況の分析結果から学習者の実態をとらえるためには，学習者の表現能力とのかかわりから考察することが必要ということになる。

さて，５－１では，「そして」が多様な連接関係をつなげること，「しかし」でつなぐことのできる「対立」が非常に幅広い概念であることを確認した。このことは，拙い表現であっても日本語として許容の範囲内に収まってさえいればよいと考える者にとっては，「そして」と「しかし」が非常に万能な接続詞となり得ることを示唆するものである。

例えば，f-01「メロスは，内気な妹と二人暮らし。」と f-02「妹の結婚式のため町に出た。」との間には大きな飛躍がある。この飛躍を解消して整った文章にするにはかなり高度な表現能力が必要となるが，全ての学習者がそのような能力を身に付けているわけではない。

f-01 と f-02 の間には，時間の経過という点において「そして」の使用を許容する余地がわずかに残っていると言える。f-01 と f-02 の間の飛躍をうまく解消できない学習者も，このわずかな余地に頼ることで，拙い表現にはなるものの f-01 と f-02 をつなぐという最低限の目的は果たすことができる。このように「そして」が用いられる時，「そして」は，安易に選択されているのではなく，f-01 と f-02 の飛躍を解消する難しさに対処する手だてとして選択されていると言える。

「しかし」も適用範囲が広い点では「そして」と同様である。つまり，表現能力が十分に身に付いていない学習者は，前後の関係に対立がない場合には「そして」，対立がある場合には「しかし」を機械的に選択することで，文をつなぐ難しさに対処していると考えることができる。このように考えることで，「そして」と「しかし」ばかりを選択する背景には，最も適切な接続詞がどれかを吟味することを怠っている学習者の姿ではなく，そのような吟味をする能力を十分に身に付けていない学習者が，文をつないでいく難しさに対処しようとしている姿を読み取ることができるのである。

「そして」と「しかし」が他を圧倒して多く出現する現象は，それらを安易に選択する学習者の姿を伺わせるものであるが，本節では，その現象を表現能力とのかかわりからとらえることで，その背景に上に述べたような学習者の実態をとらえられることを示した。

５－３　「決定的な」事態を表す「そして」

ここでは，「そして」が繰り返し用いられていることについて考察する。石黒圭(2000)には，「これまでの研究の中で見過ごされてきた「そして」の大切なもう一つの機能」として「「そして」の後には何らかの意味で「決定的」な事態が来る」ということ」が指摘されている。石黒圭(2000)は「「決定的」な事態」を「ある一連の事態を，類似性，因果関係，時間という軸に沿って並べていった結果たどり着く，それ以上進めない到達点」と規定し，以下のように述べている。

> 「それから」の場合，「～，それから～，それから～，……」と，理屈の上では半永久的につなげていくことが可能であるが，「そして」の場合，「～，～，そして～。」のように最後の１回しか使うことができないのである。「そして」は「それから」と違って，原則として重ねて使えないというのは「そして」の大切な性格である。(p32)

このことをf-01 ～ f-12にあてはめてみると，少なくともf-04，f-05の「そして」は，「それから」の繰り返しが期待されてよい箇所であると言える。石黒圭(2000)で「原則として重ねて使えない」とされる「そして」を重ねて用いる背景には，学習者のどのような姿を読み取ることができるだろうか。

「それから」を繰り返すには，その次，さらにその次に何を書くかが意識されていることが必要である。言い換えれば，その次に何を書くかということへの意識が希薄であると，「それから」の繰り返しは起きにくくなることになる。したがって，その次に何を書くかということへの意識が希薄な書き手にとっては，今書こうとしている出来事がその時点での到達点となり，その出来事を導く接続詞として「そして」が選択されやすくなると考えることができる。

f-04を書いている時に，書き手にはf-05のことはほとんど意識されず，その時点ではf-04を到達点として「そして」で導く。f-05も同様で，その次に書く内容への意識が希薄なために，f-05を導く接続詞としては到達点を示す「そして」が第一の候補となりやすいと考えることができるのである。そこには，文章をどのように書き進めていくかという意識が希薄なまま，思いついた出来事を途切れ途切れにつないでいく学習者の姿を読み取ることができると言える。

6．おわりに

本稿では，学習者が書いた「走れメロス」のあらすじに，「そして」と「しかし」が突出して多く出現する現象について考察した。その結果，学習者は，前後の内容に何らかの対立があるかどうかという大まかな指標に基づいて，「そして」と「しかし」のどちらかを機械的に選択することで，文をつなぐことの難しさに対処していると考えられることを述べた。

また，石黒圭(2000)が指摘した「「決定的」な事態を表す」という「そして」の機能を手がかりにして，「そして」が繰り返し用いられている背景には，今書こうとしている出来事をその時点での「「決定的な」事態」に仕立てることで，途切れ途切れに文をつなげていく学習者の姿を読み取ることができることを述べた。

一方，なぜ他の逆接の接続詞ではなく「しかし」が選択されるのかという問題については，残念ながらまだ多くの課題を残したままである。大熊徹(1980)では，「でも」から「しかし」に移行する理由の一つとして，「でも」が「話し言葉という状況に密着した言語」であるのに対して，「しかし」が「文章語としてより抽象的な言語」であることを指摘している。この点はさらなる検証が必要ではあるが，今後の考察の手がかりとしたいと思う。さらに，沖裕子(1995)が「文連接は接続詞に頼らなくても内容的なレベルで基本的に保証されるため，接続詞は，純然たる命題内の単語ではなく言表態度の文法形式に属すると言われている。(p29)」と指摘している通り，接続詞の分析には書き手の主観の表明という観点が重要であり，学習者の接続詞使用の実態をとらえる場合にも，この点を視野に入れておく必要があると考えている。

さらに，「そして」「しかし」の文法的機能や，学習者が「そして」や「しかし」を用いる個々

の場面を，より詳細に検討していくことも必要である。また，文法学習の具体的なあり方とのかかわりも併せて考えるべき重要な課題である。

注

（1） 資料の収集にあたっては，東京大学教育学部附属中等教育学校の鈴木一史教諭に協力を得た。

（2） 「そのように」などのように「指示代名詞＋助詞（助動詞）」と考えられるものは省いた。「そこで」については，「指示代名詞「そこ」＋助詞「で」」であることが明らかなものは省いた。また，文頭の接続詞のみを対象とし文中のもの（「そして」2例と「しかし」1例）はカウントしなかった。

（3） 加藤薫(1991)p41 に挙げられている例文の一部。全文は以下の通り。「しかし，ふしぎですね。芝田市の旅館で小寺康司の書いたものが，どうして十州は唐津在住の下坂一夫という文学青年の手に入ったんでしょうか？ 小寺康司のは未発表のものでしょう？」（松本清張『渡された場面』新潮文庫）

引用文献

石黒　圭(2000) 「そして」を初級で導入すべきか，言語文化37，一橋大学言語学研究室，pp. 27－38

大熊　徹(1980) 小学生の作文に見る「でも」から「しかし」への発達傾向，月刊国語教育研究94，日本国語教育学会，pp. 30－36

沖　裕子(1995) 接続詞「しかし」の意味・用法，日本語研究15，東京都立大学，pp. 21－30

加藤　薫(1991) 「逆接」の接続詞についての一考察―「しかし」系の接続詞を中心として―，国語学研究と資料15，早稲田大学，pp. 33－45

小林典子(1989) 「そして」による接続詞の連接類型，日本語教育論集4，筑波大学留学生教育センター，pp. 19－31

島田泰子(2005) 「そして」の用法について―用例に基づく類型の分類と分析―，国立国語研究所報告122『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究―『太陽コーパス』記念論文集―』，博文館新社，pp. 193－211

釣　雅行(1982) 子どもの思考の発達と接続詞―心理学的考察をふまえて―，富山大学国語教育7，pp. 16－27